

平成27年度第3回静岡市総合教育会議 会議録

平成27年10月29日(木)
静岡市役所静岡庁舎8階市長公室

午後1時00分開会

○赤堀次長 本日はご多忙中、お集まりいただきまして、まことにありがとうございます。
ただいまより、平成27年度第3回静岡市総合教育会議を開催いたします。

開会に当たりまして、田辺市長からご挨拶をいただきます。

市長、よろしく申し上げます。

○田辺市長 わかりました。それでは一言、御礼かたがたご挨拶を申し上げます。

きょうは、わらしべ長者みたいな感じになりましてね。オマハ市との姉妹都市提携が今年50周年で、きょう彼らが静岡に来てくれたんです。そうしたら、日本とアメリカのバッジをつけてくれてですね。次に、全国老人クラブ大会がグランシップであるということで、午前中そちらにも行ったら、会長さんが「赤い羽根をぜひつけて壇上に上ってくれ」と言われたものですから、襟元が何かすごく賑やかになって、このまま現場に来たんですけど、教育委員の皆さんは何をプレゼントしてくれるのでしょうか。これがオチなんですけどね。

大きな予算要望をプレゼントしていただくことを期待しておりますが、前回3つのテーマ、それぞれの現状や課題等に関する資料を準備しながら、活発なご議論をいただき、その結果、きょうまでに、短期的に取り組めるもの、中長期の視野に立って取り組むべきもの、それぞれのテーマごとに行程表のたたき台というものを示していただきたいということでまとまったと記憶をしております。3次総の前期4年間で取り組むものと、後期までの8年間を通じて考えていくもの、しっかり制度設計をしていく必要があるかと思えます。

当初、市長部局と教育委員会の合わせ技としての総合教育の意図は、もう繰り返すまでもありませんけれども、市民目線をここに入れていくということと、あと、100センチの視点、子どもの視点でものを考えてみるという、この2つの目線を大事にして議論をしていこうということでもあります。

その点で、平成28年度の予算要求の期限も迫っている中、より費用対効果の高い手法

や対応策も早期に考えていかなければなりません。現場の子どもや先生方の声に耳を傾けて、学校、家庭、地域、行政が連携して取り組んでいく必要があります。

きょうは、2時半までの90分という限られた時間であります。ぜひ活発なご発言をお願いして、私の挨拶といたします。よろしくお願いいたします。

○赤堀次長 ありがとうございます。引き続き、静岡市教育委員会の佐野委員長、ご挨拶をよろしくお願いいたします。

○佐野委員長 第3回目の静岡市総合教育会議に当たって、一言、教育委員会を代表して、ご挨拶を申し上げます。

静岡市の総合教育会議につきましては、第1回目において、田辺市長と私たち教育委員会が、協議すべき3つのテーマを決定いたしました。

そして、8月19日の第2回会議においては、その3つのテーマについて、実現への期待、それから、それぞれの課題について、具体的に踏み込んだ協議ができたものと思います。

ほかの都市において、この総合教育会議の位置づけとして、大綱の策定などに取り組まれているところが多いわけですが、本市の総合教育会議は、既に第1回目で大綱をもう策定されて、そして第2回目の会議で、子どもたちの学びの環境面で喫緊の課題のある井川の小中学校の小中一貫教育。協議、調整しまして、市長と教育委員会がそれぞれの役割において実現に向けて取り組むことができました。

テーマの1つであります「切れ目のない教育環境の充実」につきまして、この総合教育会議で考えた1つの形が実現に向かっていると言えるのではないのでしょうか。これは、田辺市長が最初におっしゃってございました、市民目線、それから子どもの視線を大事にしながら、静岡市の教育行政を大局的に話し合って、格段にスピードアップさせて、実現につなげていくことが、この総合教育会議の成果であると感じております。

第1回目、第2回目の会議におきまして、「静岡市の教育委員会は、いつも現場の近く、子どもの近くにあらねばならない」と申し上げておりますが、2回の会議を経まして、田辺市長も同じ気持ちを持っていらっしゃるものと、心強く感じております。

本年度最後の総合教育会議と予定しております本日は、3つのテーマについて、前回よりさらに踏み込んだ実質的な協議を闊達に行なって調整を進め、今年度中または来年度の実現に結びつけるために、市長と教育委員会それぞれが果たすべき役割を確認してまいりたいと考えております。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

以上で挨拶を終わります。

○赤堀次長 佐野委員長、ありがとうございました。

早速会議に移らせていただきます。

それでは、これからの進行は、当会議の座長である、田辺市長をお願いいたします。

市長、よろしくをお願いいたします。

○田辺市長 それでは、次第に従いまして進めます。

まずは、事務局から、3つの課題に関して、第2回以降の検討状況等について報告していただきます。その中で、それぞれの行程表等を確認するとともに、今後の取り組みについて、さらに議論を深めていただきたいと思います。

それでは、最初に、議事の（1）「切れ目のない教育環境の充実について」。教育委員会事務局の池谷局長からお願いをいたします。

○池谷局長 池谷です。よろしくをお願いいたします。

それでは、まず資料1「切れ目のない教育環境の充実」をごらんください。ここでは、小中一貫教育と学区の再編、幼小接続についての検討状況や考え方について説明させていただきます。

1 ページの下段をごらんください。

まず、小中一貫教育への意見聴取の状況ですが、教育委員会では、今年度、PTAや地域住民代表などで構成する「小中一貫教育の在り方協議会」を設置し、これまで3回の会合を開催いたしました。

1枚めくって、2ページ下段と3ページの上段をあわせてごらんください。

協議会では、毎回活発な意見交換が行なわれ、教員の負担感の増加などの課題はあるものの、学力の向上や中1ギャップの緩和などの効果が期待される小中一貫教育の導入については、おおむね肯定的なご意見をいただけたと考えております。

また、児童・生徒数の減少が著しい中山間地の学校については早急な対応が必要ということについても、おおむねご理解いただけたものと考えております。

次に、3ページの下段でございます。「小中一貫教育の在り方協議会」以外に、教育委員会版のタウンミーティングである移動教育委員会を各区1回ずつ開催し、テーマの1つに小中一貫教育を設定し、多くの来場者の方々からご意見をいただきました。

1枚めくって、4ページの上段でございます。

来場者アンケートや会場でのやりとりでも、やはり課題はあるものの、小中一貫教育

の導入については、おおむね肯定的な意見が多かったと捉えております。

続きまして、4ページの下段でございます。

子どもの目線に立った通学区域の再編についての検討状況は、通学区域と自治会の境界が異なる幾つかの学区の学校の関係者にヒアリングを始めたところでございます。今後も本格的なヒアリングを継続し、課題を整理した上で、おおむね平成30年度をめどに、学区の再編について、何らかの方向性を導き出したいと考えております。

5ページの上段でございますが、以上のような市民意見聴取、検討状況を踏まえた、教育委員会事務局の案について説明させていただきます。

まず、事務局としましては、やはり全小中学校において小中一貫教育に取り組むべきだろうと考えております。

5ページの下段でございます。

その内容についてですが、「全市立小中学校において小中一貫教育に取り組み、子どもたちを9年間で静岡市民に育てる」というコンセプトのもと、小中学校で共通の目指す子どもたちの姿を設定して、9年間の教育課程の策定、実情に応じた教職員の合同研修、小中学生の交流活動、乗り入れ授業などに取り組んでいくこととしたいと考えております。

ここで、恐れ入りますけれども、少し飛んで9ページをお願いいたします。

この「静岡市民に育てる」については、その考え方、方法等を、来年度1年間かけて静岡型一貫教育としてまとめていきたいと考えておりまして、この図はその基本的な概念を示したものでございます。簡単に言いますと、静岡市や地域の関連教材の活用、地域・大学・企業・行政との連携によるシチズンシップ教育を幹とした教育課程の工夫、能動的な学習であるアクティブ・ラーニングを推進することにより、その子の成長である縦軸に、他とのかかわりの横軸を作用させ、子どものより一層の実感ある学びと、ふるさと静岡への愛着・誇り・市民参画意識の醸成につなげる教育を展開していきたいと考えております。

戻って、6ページをお願いいたします。小中一貫教育については、平成30年度からの導入を目指し、28年度、29年度をかけて、先ほどの静岡型一貫教育も含めた教育課程のひな形づくり、学校関係者の理解促進など、準備を進めていきます。

また平成30年度からは、当面ほとんどの学校では、小学校と中学校の施設が離れたままで小中一貫教育に取り組むこととなりますが、施設を1つにした上での小中一貫教育

を理想の形として目指していくべきと考えております。

6 ページの下段でございます。前回の第 2 回総合教育会議では、「井川小・中学校の一貫校化を進めるべき」との合意をいただきまして、平成 28 年度からの施設一体型の小中一貫校化を目指し、現在準備を進めているところです。そのほかにも、ここに記載してありますとおり、中山間地の中学校、小学校についても、井川と同様に、児童生徒数の減少が著しい学校でございます。これらの学校についても、関係者との協議が調ったところから、ぜひ小中一貫校化を進めていくべきと考えております。

7 ページをお願いいたします。

これまで説明してきましたが、小中一貫教育に関するロードマップ案を図で表現させていただいております。

最後に、8 ページをお願いいたします。

幼小接続については、前回第 2 回の総合教育会議で報告いたしましたが、幼小接続研修会、園と学校による相互の参観及び協議、接続カリキュラムについての研究開発など、義務教育と幼児教育の円滑な接続を目指した取り組みを子ども未来局と連携して進めているところでございます。

以上、「切れ目のない教育環境の充実」についての説明を終わらせていただきます。

○田辺市長 どうもありがとうございました。

恐らく 3 つの協議事項の中で、この項目に一番時間がかかるかと思っておりますので、今から約 30 分を目途に時間を確保したいなというふうに思っておりますので、ご承知おきください。

ロードマップも出てきてはいるものの、どうでしょうか、皆さんの目線の期待に合ったものでしょうか。そのあたりを問題提起にしながら、ぜひご発言をお願いしたいと思います。どなたからいきましょう。顔を見合わせておりますが。

誰かが露払いをしなければ発言しづらいと思っておりますので、申しわけありません、二巡目もありますので、まずは。

○伊澤委員 今日は時間があまりないので、1 回で終わっちゃうのかもしれませんが。

前回も、最初に、私がお話しをさせていただいたことですが、やっぱりスピード感が必要だということです。全ての事業についてですけれども。やはり、それは確かにスピード感を持ってやっていくことで、必要な部分というのはあるのかもしれませんが、今回のこのいわゆる小中一貫にかかわることについては、これは何年って、すぐには言えないのかもしれないですけれども、大きな捉え方が必要なのかなと、私は思っ

います。

切れ目のない、いわゆる今でいう小中9年間、幼小も入れると10何年かになる子どもたちを育てていく中で、捉え方として、これ、私の感覚的な捉え方なんですけど、静岡市の、高さ3,000メートルから深さ3,000メートルまで、というか、このスケールのある大きさの中で、子どもたちに幼・小・中と育てていっていただけたらなと僕は思っています。

先ほどの9ページにある、幹になっている部分のところの中に、できればそういったスケール感があった上で、子どもたちに一つひとつのことについての静岡への思い、愛着を、それを持つことで、そのスケールがたくましさとしなやかさにつながっていければ、ちょっと抽象的な言い方ですけども、すごくいいなと僕は思います。

それと、あとひとつだけ例を出させていただきます。先日、ある新聞で、京都大学の山極総長が京大生に向かって「日本語で考えろ」ということを言っていました。これって何かなって、僕静岡で考えたときに、もちろん京都大学での話ですから、例とすると、グローバルないろんな状況がある中での話で、言っているのは、「英語、外国語はあくまでもツールである」という言い方。だから、やはり地元で、地域のいわゆるこの静岡というところの中で、静岡の中の考え方を持った上で、僕は子どもたちにグローバルになっていてもらいたいということからすると、やはりそのスケールぐらいは、僕はあってもいいのかなと。どこかで一つひとつの中に、そのスケールが欲しいというふうに思いました。

ちょっと抽象的な言い方で申しわけないんですけども、その辺を一番今、僕はこの「切れ目のない教育環境の充実」の中で、特に小中一貫の中では感じています。

以上です。

○**田辺市長** どうもありがとうございます。キーワードとしては、スピード感とスケールですね。

この中身について、例えばスピード感というのはどの程度のスピード感なのか、きょうお示しをいただいたロードマップが委員にとって、そのスピード感に合っているものなのか、どうなのか。あるいはスケールといった場合、最後のページにポンチ絵で描いてありますけれども、この中身というのが、委員がおっしゃったスケールというものに合っているのかどうか。そのあたりのところがポイントではないかなというふうに思いますが、続けてご発言をお願いいたします。

はい、橋本委員。

○橋本委員 今のスピード感に、多分将来的につながると思うんですが、今の静岡市の財産として、例えば、先ほどお話があった、小中連携をずっとつなげてきた土壌があり、また、この静岡市関連教材というもののの中に「わがまち静岡」という、毎年編成している社会科資料がありますよね。あれって、毎年毎年新しいツールを入れて、とても厚みのある資料が既にあるわけですよね。それをベースにしていって、新しいシチズンシップの教科書じゃないですけど、副読本的なものがつくれる素地があり、またもう1つ、実は一昨日、東京で新任教育委員の初任者研修がございまして、そこでいただいた資料なんですけど、実はこれ、小中両方の免許を持っている教員の数というので出させていただきました。上が小学校で中学校免許を持っている方で、この赤線が平均なんです。静岡県は80%もあるんです。ベスト8です。だから、静岡市もそれほど大差はないと思うんです。8割の方が、小学校の先生が中学校の免許を持っていたらしゃる。中学校のほうはちょっと少ないんですが、やはり40%近い、ベスト15の中に入っているんです。平均よりもかなり高いところに、静岡の先生方は両方の免許を持っているという素地があるという中で、そこを上手に活用していけば、結果的にスピード感のある小中連携につなげていけるのかなという印象を、おととい、とても強くして帰ってまいりました。

以上でございます。

○田辺市長 橋本委員、どうもありがとうございました。

続けてお願いします。伊藤委員。

○伊藤委員 小中一貫教育をこれから取り組んでいくということは、きょう局長のご報告にもございました。ですから、これからどんどん進めていかなければいけないという状況だと思います。

では、その中身をどうしていくかという話を、まさにこれからしていかなければいけないと思うのですが、なかなかすぐに一体型をするというのは非常に難しいことだと思います。ですから、当面は分離型でいく。徐々に徐々に一体型にできるところは一体型にしていくということになるのかなというふうに思います。

それで、その分離型をする場合に、私、先だって、全国規模の教育委員の研修会がございまして、埼玉県の大宮市まで行ってまいりました。そこで小中一貫教育の部会に出てまいりまして、先進市としての品川区と埼玉県の入間市のご報告を聞いてまいりまし

た。その中で、品川区などは本当に前々からすばらしい取り組みをされていて、すごいなと思いました。ただ、どういうふうなやり方をしていったら、分離型でいいのだろうかと思うと、入間市の場合もそうでしたが、「まずは先生方の交流から始めましょう」というようなスタートになっているようです。先生方の交流というのは、先生方が研修会をするというレベルから、あと実際に小学校の先生が中学に行く、あるいは中学の先生が小学校に来てくださるというような、今橋本委員がまさにおっしゃられた免許の併有の問題もありますが、そういう形でやっていきたいと思いますということが行なわれているようです。それは、とてもいいことだと思います。

ただ、そのときに、小学校の先生が中学に行くと、そこ、空いてしまうんですね。小学校の先生がお1人いなくなるわけです。逆に、中学の先生が小学校に来てくださるということは、またそこも空いてしまいます。そうすると、空いた時間、もともとの学校の子どもさんたちが先生のいない状態で自習になってしまえば、それはちょっとおかしいことになってしまうと思います。

ですから、分離型で、そうやって免許を併有されている先生方に移動してやっていただくときには、その先生がいなくなったときに手当がちゃんとつくのかどうかというような問題。入間市とか、品川区などでは、やはりある程度、先生を少し、講師さんなどで余分に来ていただいて、カバーできるような対策もあわせてなさっているというふう

に伺いました。

ですから、いつも教育委員会はお金がかかる話ばかり申し上げて恐縮なんですけど、その分離型でうまく進めていくときには、そういう先生方の手当も、これから必要になってくるんじゃないかなというふうに考えております。それが1点です。

○**田辺市長** わかりました。ちょっとここで止めましょうか。

この1点は、少し実務的な事柄に入っていきますので、池谷局長、このあたりのところは、どんなふうに今考えているのか、少しコメントをお願いします。

○**池谷局長** 現在のところ、やはりいろいろなところを見に行きますと、伊藤委員が言われたように、人を補充しないとなかなか難しいという面はあります。ただ、人数に関して、どれくらい増やしてくれるかという実務に関しましては、現在のところ、なるべく手をかけない中で進めていきたいというのが、予算的な面もありますので、実情ではあります。

ただ、本当にやっていけるのかという点に関していきますと、多少なり助けてもらい

たいという面は持っております。

○田辺市長 助けてもらいたいというのは？

○池谷局長 予算的な面です。

○田辺市長 はっきりおっしゃってください。「まだこれから」というような答えだと私は受けとめました。

2点目、お願いいたします。

○伊藤委員 ですから、ぜひその点も今後の検討課題かなというふうに思っております。

それから、次に2点目で、静岡型の、いわゆる教育課程と申しますが、シチズンシップ教育と申しますか、その中身についても、まさに今後検討していかなければいけないことだと思っておりますし、また市長のいろいろご意見とか、お知恵も拝借させていただきたいと思っております。

これは本当に私の個人的な思いなのですが、子どもたちが静岡を愛する、静岡のことをよく知ってもらうというのは、とても大事だと思います。ただ、その気持ちを持ってもらうだけではなくて、やはり私たちが小中一貫教育をするということは、たくましくしなやかな子どもたちをつくっていくというところの目標に目がけた、1つの教育としての手段だと思っております。なので、「たくましくしなやかな子どもたちを育てるために、どういう教育をしたらいいのか」という視点が、いつも必要だと思います。

そのために私は、できれば子どもたちが、この静岡を愛する気持ちで、静岡について何か発信するとか、形にあるものを何かつくるとか、なすとか、まだ具体的なイメージはなかなか持てないのですが。何か静岡のことについて、日本全国に、あるいは世界に、自分たちの成果でも何でもいいのですが、そういう発信するようなところまで、このカリキュラムでやれたらいいなというのは、とても強く考えております。ですから、できればそういう内容に近づくようなものができたらいいなというふうに思っております。

以上です。

○田辺市長 どうもありがとうございます。大変面白い問題提起をいただきました。

ご発言の中に、おおよそ2種類、1点目の、実務的に教育委員会の事務局はどう考えているかということと、あるいは教育委員の中でフリートークをするべきことと、2種類あるように思いますので、2点目については、また皆さん方のご意見も伺いたいなというふうに思います。ありがとうございました。

○高野委員 順番でよろしいでしょうか。

○田辺市長 はい、よろしくお願いします。高野委員。

○高野委員 小中一貫教育を実施するに当たって、私は一番大事なことは、この工程表でいいますと、教育課程をつくるというところではないかと思っています。やはり小中一貫というのは、もちろん中1ギャップの解消とか、いろんなことがありますけれども、それも含めて、9年間を見通して教育課程をつくって、その長いスパンで子どもたちを見ていく。さらに、後で言いますが、静岡市の場合は幼も入りますので、非常に長いスパンで子どもたちを見て、振興基本計画でいうと「知・徳・体」、そういったバランスを持った子どもたちを、その間にどう育てるかというスタンスで教育課程をつくっていくということが大事ではないかと思っています。

それともう1つ、市長からお話があるだろうと思うのは、静岡らしさをどこで打ち出していくかという、それはなかなか難しいことなんですけど、1つ、先ほど橋本先生がおっしゃった、「わがまち静岡」という副読本は私も非常にすばらしい副読本だと思っています。静岡のことについて、自然、地理、歴史、それから公民分野に至るまで、静岡の子どもたちに伝えたいことというのをかなり網羅的に書いてありますので、さまざまな教科で使えると思いますね。それで、独自教科を小中一貫になるとつくれるということもあるんですが、そういったことを考えるときには、あの副読本をかなり有効に使えるのではないかと思います。

それと、やはり静岡市の強みとして、今年度からですか、こども未来局長がいらっしゃいますけれども、こども園ができたということで、幼保の連携した、保育と教育の両方を満たすような保育教育が進められている、幼児教育も進められているという、そこをやはり静岡市の強みということで、幼稚園から義務教育まで、長いスパンで考えた静岡型の小中一貫、幼小中一貫教育という考え方というのがあるんだと思います。

それと、そういったことをメインに考えていったときに、やはり実施のための環境整備としては、先ほど伊藤委員がおっしゃった、教員の育成、確保ということが、とても大きいのではないかと思います。特に分離型でいくと、施設一体型に比べると、教員に委ねる部分というのがとても多くなると思います。教員の力量、教員の質に左右される部分というのが非常に多くなります。

ちなみに、在り方協議会の際に、静大の武井先生だったかな。磐田の小中一貫の説明をなさるときに、「教員が変わる、地域が変わる、子どもが変わる」という、そういうキャッチフレーズを出されました。先生方の意識が変わる、先生方の教え方が変わる

という、それはとても大事なことだと思います。一方で、今学校の現場は、非常に世代交代が進みつつあります。ベテランがやめて、若手を育てていかねばならない、確保していかねばならない。それはとても大きな宿題になっているかと思います。

そういうところで、ちょうどそれは、ある意味いいチャンスでもあると思うものですから、やはり小中一貫を前提とした教員の確保、育成ということを進めていくということが必要でありますし、一方で、「平成29年度問題」と私は言っているんですけども、県費教職員の問題がありますので、そこら辺で、かなり市の、政令市の間でも、教員の確保に力を入れるところと、そうでないところと差が出てくる。そのためには、勤務条件などもしっかり、ほかに劣らないようなものを考えないと、なかなか確保できないということで、そこら辺もきっちり考えていく必要があるのではないかなということをおもいました。

それともう1つ、思いつきなんですけれども、先ほどもおっしゃった、観光・交流というのを、静岡市の3次総ではかなりメインにしていってほしいです。教育委員会の中で、子どもたちが英語を学ぶために、英語で静岡市を紹介するような、そういうものもつくったらどうかというふうな話が出たことがあります。何かそういったものを静岡市の観光・交流施策の中に位置づけるとか、そんなこともできたらいいなと思います。これはちょっと余分ですけども。

○田辺市長 どうもありがとうございました。大変多岐にわたる論点をいただきました。やっぱり先生が変わらなければならない。量の問題、質の問題、両方あると思います。これは議論すべきテーマかなというふうに思います。ありがとうございました。

高木教育長お願いします。

○高木教育長 教育委員会がやること、それから市長部局にお願いをして、市長部局として協力していただくこと。その接点の場がこの会議だと思っています。

私たちが、「切れ目のない教育」ということを、どうして大きくテーマとして、この場に持ち上げてきているのか。そして、その1つのツールとして小中一貫教育という手だてを考えているのかということ、やっぱりいつも考えなくちゃいけないと。それは、子どもたちに確かな学力を保障すること。そして、心身ともに健やかな成長を願って、その形をなし得ると。これが静岡の最大の使命だと思っています。静岡市に来れば、その教育が展開をされていて、安心して、子どもたちが、自分自身に肯定感を持って、そして他と協調する中で成長していくんだと。「静岡市の教育は素晴らしいんだ」という

ような、誇れる場にしていきたいという大きなことであります。だからこそこれをして
いるわけですが、

それでは切れ目のない教育って何かということだと思いますけれども、それは今言っ
た、一つひとつのハードルの必要性もありますけれども、そのハードルが、今大きな課
題になっていると。それを工夫するために幾つかの手だてが必要であるという中から小
中一貫教育が生まれてきました。

小中一貫教育の必要性は、私たち事務局では、もう毎日のように話をしてやっていま
すけれども、一番大切なのは、その意味合いを、学校現場、校長先生初め教員が理解を
することだと思っています。これがなければ、いくら事務局が意見を出し合っても、市
長さんがいくら応援をしてくださっても、これは浸透していかないと。なので、教育委
員会の最大の責務は、なぜ切れ目のない教育が大切なのか。そのために小中一貫がどう
いう意味合いをなすのだろう。これを十分に現場に理解をしていただいて、学校みずか
らが小中一貫を推進しようという意欲になることだと思っています。これは私たちの役
目です。

それに加えて、先ほど伊藤委員からもありましたけれども、小中一貫教育をやってい
く、新しい教育の方向性をつくるには、どうしても財源が必要です。何もなくてやりな
さいということは絶対ありません。その中で、幾つかのお願いを、これからもあるわけ
ですが、その1つに、小中一貫で小中が連携をしていくときには、必ずコーディネ
ーターが必要です。誰かが間に入って、そのお膳立てをしていく役割をしていくと。
そういうパイプ役が必要になってくると。それじゃ、そのパイプ役をどのように今後考
えていったらいいのか。要するに、教育委員会事務局の中でやれる、熱意とか、情熱と
か、「時間を超えてやりますよ」という、そういうものは決してなくはないと思ってい
ますが、教師に対するだけのジャンルでは決してないと思っています。これがやはり、
どうしても人的な面の必要さです。

それから、子ども同士が小中や幼小を行き交い、交流をするのに、どうしてもそこに
物理的な移動であるとか、移動方法であるとか、移動時間であるとか、これを保障して
いかなければなりません。そこにはどういう形が必要なのか。やはり財源も必要でしょ
う。何かのシステムも必要でしょう。こういうようなところを、ぜひ、市長を初め市長
部局の皆さんも理解をしていただいて、新たな施策を展開するには、必ずそれに伴った
財源であるとか、何か支援が必要になるんだということをぜひご理解いただいて、お互

いに歩み寄ったところで応援をしていただけたら、ありがたいなということです。これが大きな1点です。

もう1点、ぜひお願いしたいのは、中山間地の小中一貫です。井川については、本当に大きなご理解のもとに、大きな展開があります。でも今後、大川しかり、梅ヶ島しかり、もう立て続けに地区がありますので、今私たち、交渉していますけれども、適宜折り合ったところで、いい形で小中一貫、施設一体型という形で展開をしていきたいと思っています。ぜひこれも一つひとつご理解いただいて、相応の応援をお願いしたいと思っています。

大きく2つでございます。

○田辺市長 どうもありがとうございました。高木委員、今までの4人の発言も踏まえて、総括的にコメントをしていただいたと、私は受け取らせていただきました。

先ほども申し上げましたとおり、実はこの話、例えば、最後の中山間地をいかにするべきか。これはやらなきゃいけないことですね。そして予算の問題。「平成29年問題」は、本当に大変な課題であります。私も予断を許さないというふうに、腹をくくって、県と向き合っていかなければいけないなというふうに思っていますが、こういうことは、逆に言うと、何をやりたいかということがはっきりしていれば、ついてくることとも思います。

ここでは、その問題はともかく、先ほど伊藤委員がおっしゃった言葉を借りれば、何を発信していくかということですね。「静岡市で9年間一貫教育をしたら、こういう人間に育つんだよ」というものが、何がいいのかということ、もう少しはっきりしていないと、例えば静岡型一貫教育と、このポンチ図でやって、この前ちょっと、この会議がある前に、私、少し問題提起は事務方にしておいたんですけどね。このスケール感という話にもなるんだけど、例えば、この南アルプスというのをね。岐阜県は「北アルプス」って直せば同じだし、この「お茶」というのを、例えば山形県は「サクランボ」とやれば。そのレベルでやるというのを超えた、少し時間の物差しを長くしたような、何を静岡の子どもたちに発信をさせるかということが必要なのではないかなというふうに私は思っています。

例えば、先日、東海北陸ブロックの校長先生の会議があって、所管の福井県は、全国で体力テストが群を抜いてナンバーワンですね、小学校。なぜならば、やっぱりそういう教育をしているんですね。合間の時間で、とにかく走ったり、とんだりかけたりとい

うようなことをやっている、1つの蓄積の成果として、そういう立場にいます。これはもう、本当に教育委員会ぐるみでやらないと出てこない数字で、昔「わんぱくでもいい、たくましく育ってくれれば」と。まさにそうなんです。小学校のときというのは、知識を詰め込むよりも、こういったところが、逆にたくましくしなやかな子どもたちをつくるんじゃないかというようなことを私、申し上げたんですけれども。

何でもいいんですよ。例えば、小学校1年生から中学3年生まで、静岡市の子どもは気持ちよく挨拶をします。今、学校現場では、校長先生のポリシーでやっているところもありますよね。あるいは、小さいころはやるけれども、だんだんやらなくなる。だけど、もうとにかくやると。運動部に入っていないなくても、みんな気持ちよく挨拶ができる。あるいは、例えば授業中、やりとりの中があるわけですね。私、いつも思うんですけど、どうしても日本の子どもというのは、ほかと違った行動をとるとというのがすごく苦手。ある意味で、すごく協調主義なので、まさに我々もそう、みんな発言しないんです。ぱんと発言をしないんです。それは、本当は考えていることがあるんだけど、周りの様子を見い見い、シャイなんです。シャイ。どうしてシャイなのかとか、それを、例えば、静岡では、子どものころから「発言をすることは、とにかくいいことなんだよ」ということで、例えば先生が質問をしたら、みんな「はい」「はい」と。これが中学3年になっても、誰かが答えると。今までの日本人の枠を超えるような、そういう雰囲気、静岡の義務教育にあって、9年間通して徹底的にそういう価値観を教えたということで、そういう子どもたちになると。これは非常に、国際社会でたくましくしなやかに生き抜いていくときに、すごく大きな力になるわけですね。ただ、今の日本の中では、「あいつばかり、いい格好しやがって」みたいに言われることを警戒しながら、「まあ、やめとこうか」となる場合が多いんです。

いずれにしても、私の言いたいことは、何か1つ、静岡らしい発信、教育というのが何なのかなということも考えていきたいなと、この場で。というふうに思っておりますが、これは1つの例であります。何か、先ほどのご自分の、あるいは他の委員の発言について、何か補足はございますか。

しゃべり過ぎました。どうぞ。

○伊澤委員 今市長のお話にもありまして、先ほどの伊藤委員の話にもあった、いわゆる静岡を発信していくということの中で、私は思うんですけど、山形だったらサクランボ、静岡にはお茶があります。でも、そのお茶について、どこまでその副読本に入っている

かどうかわかりませんが、どこまで細やかに伝えているのかということ。そういったことについても、1点ぐっと掘り下げてやっていったらいいのかなど。

「お茶」と言っても、「聖一国師」って普通に出てくるのかなって、子どもたち。普通、「静岡なら出てきていいでしょ？」って私は思うんですけど、そこまではないんですよ、まだ。お茶っていっても。歴史なのか、文化なのか、産業なのか。その辺もないので、「お茶」って出すならば、圧倒的に、もちろん宇治にも、いろんなどころにも、今鹿児島が生産がものすごいですけど、「静岡で『お茶』と言ったら、子どもたちはここまでの話をするよ」と。それは、今伊藤委員が言うように、発信できるよというくらいのところまでやれたら、このお茶も生きてくるんですけど。ただ給食でお茶を飲んで「お茶を知ってください」という話では、ちょっとないよねというふうに思いました。今、市長がお茶の話がされたので。

○田辺市長 私も同感です。伊藤委員、何か補足できますか。

○伊藤委員 お茶を知るということも大事ですが、実際に自分でおいしいお茶を入れられる、おいしいお茶を飲める。お茶のおいしさがわかるというか、「年をとらないとわからないものだ」と言われてしまえば、そうかもしれませんが、余りにも今の若い人たちはペットボトルのお茶に慣れ親しみ過ぎていて、本当のお茶のおいしさって、きっとわかっていらっしゃらない方も多んじゃないかと思います。

ですから、次のおいしい給食の話にもちょっとつながりますが、やっぱり子どものころから、おいしいお茶を知ってもらったり、「おいしい茶は、こうやったら入れられるよ」ということを、みんな勉強してもらったり、知ってもらいたいというのは思います。

以上です。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

橋本委員、何か補足はありますか。

○橋本委員 やはり、おいしいお茶をいただくということと同じく、発信の形がね、自分がおもてなしをするとか、ご家庭でお客様が見えたときに、子どもがお茶を入れてくれるとかね。あるいは学校行事で来賓の方にきちんとお茶を入れるというような経験も、小さいうちから大事かなと思うんですが、静岡市の学校には、今きちんとしたお急須と茶器セットが配付されていて、多分そういう市町ってあまりないと思うんです。各学校に本当にきちんとした茶器があって、それを使って勉強ができる場所はないと思

うので、そういう部分も十分生かして、きちんと自分がおもてなすという勉強もさせていけたらいいかなというふうに思いました。

以上です。

○田辺市長 どうもありがとうございます。高木委員、どうぞ。

○高木委員 先ほど市長から、静岡の子の力ということで、全国に誇れる力等々が、誰もが認められるような、「そういう一斉的な、一律どこでもなし得る教育ってどうでしょう」という提案があったと思うわけだけれども、まさしくそうですね。「これだったら全国どこにも負けない」「このことは誰にも誇れる」と。それはすごく自信になると思うんですよ。確かに1番というか、すごいところで。ただ、静岡の子たちが、1番ではないんだけど、とても平均以上といいましようかね。どれも、笑顔もすばらしい、挨拶もすばらしい、人との接しもそれなりにできるという、標準を超えるレベル感があるのも、ある意味静岡かなと。静岡らしさといえば静岡らしさでしょうけど。

改めて、今市長が言われた静岡型一貫教育というスタイルだけじゃなくて、その中でどういう力をつけていくんだということについては、今後十分議論をして、そしてまた、学校現場とも理解をしながら、現場とともに、ある1つだけが1番ということがいいかどうかわかりませんが、そういうことも求めていく、望んでいくような姿勢というのは、これも必要かなと感じています。

○田辺市長 ありがとうございます。このポイントはTo be continued。きょうは申しわけない、時間がないので、これは教育委員と、私も必要に応じて交わって、ちょっとそのあたりはもう少し論点を深めていきたいなというふうに思います。

最後にもう1つ、7ページのロードマップ、高野委員、これはどんなふうにごらんになったのでしょうか。ちょっと感想を教えてほしいんですけども。

○高野委員 ロードマップ。私は先ほど申し上げたように、教育課程をつくるということが一番重要だということが1つ。それと、やはり現場の、今回の静岡市の小中一貫教育というのは、かなりタイトなスケジュールでやるものですから、ここに学校長との意見交換などありますけれども、管理職、校長への情報提供、教育課程をつくるに当たっては、やはり現場の先生たちのほうからいろんな意見を言っていただくということが必要なのではないかと思います。

それと、やはり移動教育委員会なんかでも出ていたんですけど、子どもたちの移動についてのご心配というのが、保護者の方とか、あるいは地域の方などからも出ています

ので、そのあたりについての配慮というのが必要だというふうに思います。

ロードマップとして、これにスピード感があるかどうかということについて、そこまでは。

○田辺市長 いや、市長部局として長いご経験をもとに、先輩としても、教育委員を超えて、ひとつ叱咤激励をお願いしたいなど。

○高野委員 とにかく教育課程についてのことと、あと学区再編についての検討ということがありますけれども、このあたりは通学区域を小中一貫になったときにどのようにするか。特別支援学級などの問題もあるものですから、そのあたりはバランス感覚を持って、上手に進めていく必要があるんじゃないかなというふうに思っています。

○田辺市長 どうもありがとうございました。

切れ目のない教育という論点の中で、大きく2つ、理念的なことですね。何を静岡らしさとして求めていくかということ。そしてもう1つは、ロードマップの中で、いつまでに何をやるということをどうしていくかと。その中で、中山間地域は、何としても早目にとりかからなきゃいけないというようなご指摘もありました。

そして最後に、これは委員長から、この論点の総括的なコメントをお願い申し上げます。

○佐野委員長 よろしく申し上げます。

ロードマップに関しても、私もちょっと感じるところがございますけれども、スピード感なんですけど、やはり丁寧なスピード感がかなり必要かと。恐らく学校の先生方は、一貫教育というと、分離型を想像しないで、一体型になる、かなり労力のかかるものだというイメージがあるかと思うので、あらゆる意味で、もう少し丁寧にスピード感を持っていくためのロードマップ、つまりもう少し掘り下げていかないと、恐らく誤解を生む可能性も出てくるかなというような気がします。

といいますのは、この小中一貫教育に関しましても、学校の先生方のご理解も、地域のご理解とか、さまざまなご理解がやっぱり必要になってくると思いますので、そういった理解をどのように進めていくかということも、やはりかなり掘り下げていく必要があるかと思っています。

肝心の、やはり教育課程。教育課程の話が、きょうかなり詳しく、皆さんご議論いただいたんですけど、やはり教育課程は、シチズンシップ教育、市共通のものと、地域独特のものという考え方を割とされているんじゃないかと思っています。例えば、有度地区で

いうと龍勢の花火があつたりします。そういったものを、小中一貫で、教材として取り上げるとか、そういった市の共通の部分を教育委員会で議論し、また地域のところは学校と地域で議論していただくとか、それがコミュニティスクールという形になるのかどうか分かりませんが。そういった形で、いろんなことが絡み合ってくるのかなという気がしております。

学区の問題は、同じ小学校なのに違う中学校に行ってしまうというのは、そこからやはり子ども目線で、安全で近い学校に通えるのがやはりベストですので、そこから議論を進めて、教育委員会としてはこれがいいというのを考えていく必要があるかと。それをこの小中一貫と完全に絡まないとしても、関連性を持たないとしても、議論していく必要もあるかというふうに考えております。

以上でございます。

○**田辺市長** 委員長、ありがとうございます。私も委員長と全く同感でありますので、それをもう少し深掘りをする必要があるかと思えます。

また、ロードマップの件について、委員長と同じような印象を持っています。大ざっぱ過ぎますよね。残念ながら、私のレベルでは、例えば、第3次総合計画を昨年つくり込みましたけれども、市長部局の議論の中で、「これをロードマップとして公に出すのは、ちょっと大ざっぱ過ぎるな」というような印象を持ちました。前回の教育会議からそんなに日がなかったということもありますし、本来業務の中で新しくできた総合教育会議ですので、そのあたりの作業量が限られていたということもあるんでしょうけれども、平成30年の「小中一貫教育の導入」と。ここだけですよね、いわば決まっているのはね。学区再編についても、27年度「検討」、28年度「検討」、29年度「検討」と。これは検討して何をするのか、どこまで行くのかということをきちっと書き込まないと、工程表ということで公の資料にするには、ちょっとお粗末な感じがします。

なので、これは市長部局のほうも少し、遠慮しているんです、実は。遠慮しているんですよ。だけれども、もう少しコミットメントしてもらって、アシストしてもらって、いわゆる政策立案能力の問題だろうかと思えますので、まだまだそういう企画的なこと、政策立案的なこと。教育委員会の事務局が慣れていないのか、それともほかに忙しいことがたくさんあるのか、よくわかりませんが、もう少し精緻な工程表をつくった上で、それがどうかという議論をしていかないと、これでは議論のしようがないかなというふうに私は感じました。

以上です。

それでは、次の論点に参ります。（２）「教員の多忙解消について」に移ります。このテーマを、池谷局長、説明をお願いします。

○池谷局長　じゃ、続きまして、資料２「教員の多忙解消」をごらんください。

今回は、教員の多忙解消策として、校務支援システムの導入に限った説明をさせていただきます。

１ ページ目、下段をごらんください。

まず、そもそも校務支援システムとは、児童・生徒に関するデータを効率的に活用することにより、各種資料の作成等の省力化を図るとともに、データの管理を徹底するシステムでございます。

下の図をごらんいただきたいのですが、例として、指導要録への出席日数の記載の流れを示してあります。現在は出欠記録から指導要録までの各段階で作業が生じていますが、システム化することにより、これが最初の出欠席の入力だけで最後の指導要録への記載まで自動的に済んでしまうことをあらわしております。

１枚めくって、２ ページ上段をお願いいたします。

他の多くの政令指定都市では、この校務支援システムの導入が進められているところ です。

２ ページの下段に行きますけれども、この校務支援システムの評価ですが、先行都市である大阪市や熊本県の事例を見ますと、校務処理に係る時間を１日１時間程度削減できています。

また、前回の第２回総合教育会議で報告いたしましたのは、静岡市においても、校務支援システムの実証実験を行なっております。

その関係で、少し飛びますが、１枚めくっていただきまして、４ ページをお願いいたします。

こちらは、静岡市における実証実験校の教員から、実際に校務支援システムを使ってみての感想になります。まず、「出席簿作成、成績処理、通知表作成等のデータ連携が可能となり、事務処理時間の短縮につながり負担が軽減された。その結果、子どもに接する時間や子どものために使える時間が増えた」。

下のほうに行きますけど、④番ですけれども、「出席簿がそのまま成績に反映され、成績一覧表、通信表と作業にかかる時間や負担感が減り大変助かっている、その分、教

材研究など、よりよい授業を行なう準備に時間を割くことができた」といった意見が多く寄せられるなど、校務支援システム導入の最も大きな効果として期待できるのが、業務効率の向上による子どもに向き合う時間の増大でございます。

校務支援システムの導入には、多大な経費が必要とされることも事実であります、教職員が、児童・生徒理解、授業研究、保護者対応など、子どもと向き合う時間を確保できれば、それは静岡市の教育の質の向上につながります。教育委員会としては、これからの静岡市の学校には校務支援システムがぜひとも必要であると考えております。

1枚戻って、また3ページをお願いいたします。3ページの表でございます。こちらは校務支援システムの導入のスケジュールの案となりますが、システムの本格稼働までには、かなりの時間を要することが予測されておりますので、可能な限り早急な着手が必要であると考えております。

以上、「教員の多忙解消」についての説明を終わらせていただきます。

○**田辺市長** どうもありがとうございました。この「教員の多忙解消」については、大変関心の高いテーマであります。きょうは、教育問題に大変熱心な市議会委員の有志の皆さんも傍聴に来てくださっていて、大変心強いのでありますけれども、9月の議会でも、教員の多忙を何とか解消する、その決め手として、校務支援システムはどうだというような問題提起をいただきました。

ただ、どういうふうにもその費用対効果を高めていくかということが課題となってくるわけですが、これについては、池谷局長の今の説明を補足するような形で、高木教育長から、教育委員会の考え方をもう少し補足をしていただけますか。

○**高木教育長** それでは私のほうから。

この校務支援システムは、教員に意欲を持たせ、そして炎をつける大きな切り札だと我々は受けとめています。要するに、多忙解消ということで、もろもろの策はとってきました。文書の作成量を削減する、それから出張の回数も減らす等々、もろもろ細かい中でやれる手立てを打って、学校側も職員会議の回数を減らすであるとか、学校の自助努力もかなりされてきています。ただ、一つひとつ、トータルとしても、なかなか目に見えて、「ああ、本当に削減されてきているんだな」という実感は、なかなか教育の現場にはつかみ切れていません。

一番実感をつかんでもらえるものが、私は校務支援システムの導入だと思っています。これはどれだけ教員に勇気を与えるか。そして、それが実際に活用されていって、現場

の先生方がその時間の生み出されたものを子どもたちとともに向き合える時間に変えていくか。結果、市長が最初に言われた、静岡として子どもたちにどういう力をつけていくかに、必ずはね返ってくるというふうに思っています。

ですので、大きなお金は確かですけども、今こそ、この設置こそが、静岡の教員に今後、また静岡に手を挙げてくれる教員志望者にとっても大きなツールであると考えていますので、ぜひ市長を初め、市長部局のご支援をお願いしたいと強く思っています。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

橋本委員が大きくなずいておりましたけれども。現場の小学校の校長先生を経験しておりますので、このことについて、現場から見た教員の忙しさの中で、校務支援システムを入れることのメリット。「実際こういう大変なところがあるから、このシステムを入れてこうするんだ」という、少しリアルなところの報告を兼ねて、この公の場ですので、ご披露いただければありがたいなというふうに思います。

○橋本委員 まず、本当に手作業がとても多くて、繰り返しの作業がとても多くて、そして間違いやすい作業ということで、間違えてしまった後のまた処理が大変でということで、非常に気を遣うし時間も使うという作業になります。ですので、もし、このシステムを全校で導入してくれるんだよということになったときに、「本当に静岡市こぞって教員を応援してくれているんだな」というメッセージとして、勇気を与えるのではないかなと思っています。それによって、それこそ1時間浮くのか、30分浮くのか、時間的な部分というのをカウントするよりも、先生方の意欲的なものについて、非常に火をつけてくださるなということは思っています。

もちろん、だからといって、これで全て、それこそさっきの小中一貫の話の負担感と相殺できるかといったら、また別の問題になっていくかと思えますけれども、本当に、特にミスが少なくなるということについては、子どもにとっても保護者にとっても、信頼感を得る上にとっても、非常に大きな要因になっていくのかなと。本当に悲鳴を上げたいくらいの、切実に私は思っております。

以上です。

○田辺市長 どうもありがとうございました。

そうしましたら、この論点について、ほかの委員の皆さん、ご発言をお願いいたします。

はい、高野委員。

○高野委員 今後小中一貫を進めていくということになると、かなり最低限の、もしかしたら条件になるのかもしれないというふうに思っています。先生たちの連絡、学校同士の連絡、特に小中の施設分離型ですと、何らかの形で子どもたちが移動する以外にも、先生たちが移動する以外にも、情報交換、情報共有のツールが必要だと思っていますので、そのためには校務支援システムというのは、かなり最低限の条件ではないかなというふうに私は思っています。

ちなみに、ちょっと進んだところでは、つくばあたりは、先生たちがテレビ会議をやったりとか、授業をテレビでやったりとかやっています。そこまで行かなくても、もちろんいいとは思いますが、最低限の情報交換ができるための条件としては、校務支援システムの導入というのは必要ではないかなというふうに私は思っています。小中一貫教育を効果的に実施するために。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

私からの疑問は、もし、そんなに切実に学校現場が待望している、悲鳴を上げるほど望んでいるということなら、なぜもっと導入できていなかったのかなというふうに思わざるを得ないんですけれども。一番教育委員経験が長い伊藤委員に、そのあたり、弁明も聞きたいなと思うんですけれど。

○伊藤委員 実証実験は本当にもう昔から、私が教育委員になって、もう本当にすぐあたりから、山間地域とか、あちこちでやってくださっていて、それを「早く実現していきます」ということだったのですが、なかなかその先に進まなかったということがあるようです。

多分、余りにも大きな理想的な絵を描き過ぎて、クラウドシステムを入れて、もう全てそれで一元化して、学校全部をつなげて、全てやるというような、すばらしいビジョンが、どうもきつとあったんだと思うんです。もちろん今もあると思います。けれども、「それをすると莫大なお金がかかってしまうので、とてもそれはできないよね」ってなったときに、どこまで縮めていけるのかという、そういう現実的な見合いのところの発想がなかなか行かなかったんじゃないかなと思います。

やっぱりこの教員多忙化の解消のことが非常に喫緊の課題になってまいりまして、「これはやっぱりもっと早くやらなければいけない」というふうな思いで、こういう現実的な路線が出てきたのかなというふうに感じております。

ですから、ぜひやっていただきたいと思っております。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

ほかにいかがでしょうか。伊澤委員。

○伊澤委員 多分これ、より具体的になったのは、29年問題がより身近に迫ってきたところもあるのかなど。本当に先生の確保も難しくなっていく中で、その中の環境が整っていないと、どうしてもやっぱり難しいのかなというところもあると思います。

ですから、やっぱりこの辺が、今伊藤委員が言ったように、前から私も、教育委員になったばかりのころに、教育クラウドの話は出ました。ですけど、余りにもスケールが大き過ぎて、お金の話ができなかったです。とてもできるスケールではなかったのかなというふうに思います。その辺がいろいろ研究されてきて、また「最低限できるところから」という形の中からできてきたのかなというふうにも思いますし、あとスケジュール案が出ましたけれども、このような形でもし進められれば、次の多忙化解消のことにまた進めていけるのかなというふうに思いますので、ぜひこれが具体的になるといいなと思っています。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

高野委員は何かございますか。

○高野委員 皆さんおっしゃるとおりです。私が来たときには、多分まだクラウドの話で、ちょっと途方もない話だというふうに思っていました。最低限、学校の中には校務支援システムと、あとインターネット接続というあたり、かなり絞り込んで、今事務局のほうでも検討していますので、そこは本当に、先ほど申し上げたとおり、平成29年問題対応、あと小中一貫教育対応ということでの条件として、校務支援システムの導入はぜひ考えていただきたいと思っています。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

恐らく、やはり財源の問題というのが今までのネックになっていたんだろうと思います。ただ、申し上げておきますと、やっぱり今まで教育委員会と財政局の距離が遠かったと思うんですね。ここに至るまで、いろんな関所があって、関門があって、そしてはね飛ばされていたと。現場の声がね。そういうところを、総合教育会議が発足したから、やっぱり予算を充てるのは我々市長部局なんですね。ですので、教育委員会から学校現場に基づいた切実な声というのを政策化してもらった上で、説得力のあるものであるならば、我々はやっぱり「多少お金がかかっても、これは充てなければいけないね」というようなやりとりが、この総合教育会議でできる可能性が高まったという理解をしたい

と思いますし、またこれ、例えばベンダーの企業は一生懸命売り込んでくるでしょうけれども、これはね、営業ですから、とにかく「これがいい、あれがいい」と。「これだけかかりますよ」というようなことになるわけですが、それを言い値で入れて、使いこなせないというようなこともあるわけですね。我々のスマホだって、メーカーは「これがいい、あれがいい」と、一生懸命言うけれども、そのうちのどれだけ機能的に活用しているか。同じことですよ。

だから、そういう中で、それをそのまま財政に持っていったって、「そんな高いものだめですよ」と言われるに決まっているわけですよ。それはさっきの工程表と同じことで、やっぱりこれはちゃんともんでもらわなきゃいけないわけですね。財政が、あるいは市長部局が、「なるほど、それじゃぎりぎりのところ、ここまで絞ったのか。静岡型にカスタマイズして、高額だけれども、ここはこのぐらゐの出費はやむを得ないな」というところまで政策化してもらって、これをこちらに持ってくると。そういうことは、これからぜひ、これ双方の努力だなというふうに思いますけれども。

これを叩き台として、委員長、この会をまとめてください。

○佐野委員長 よく言われることに、先進国で一番生徒に向かい合う時間が少ない日本の教師。そして一番世界で残業が多い日本の教師ということがよく言われます。やはり多忙な要因の1つ、一番大きなものは報告書、事務報告ということは、小中ともに一番に挙がっております。それを少しでも解消できるようにして、この総合教育会議で、市長とこういうふうにお話できて、実現に向かうのは、すごく喜ばしいことだと。

しかし、先ほどおっしゃいましたように、価格に見合う、やはり仕様と効果、それから必然性をぜひ、我々も検討していかなきゃいけない。それは襟をただしてやっていかなきゃいけないなという気はしております。

また、何の校務を支援していくのか。この具体的な内容はシステムエンジニアさんとかにかかってくると思うんですけども、仕様に関しても、やはり学校当局の現場の声を吸い上げて実現していかないと、おっしゃったように、できたはいいけれども使うところが少なくなってしまう意味がないので、その辺は非常に問題として課せられるなと。

ただ、学校というのは、先ほどありましたけど、手書きの文化がやはりあるんですよ。手で書くことによって、情報以外に心を伝えるようなところがありまして、そういった生徒と先生の心を通わすような手書きの部分というの、非常にいいことでもある

かなという気はしておるんですけども、ただ、先生がそれを丁寧に書く、間違いなく書くのが仕事ではないので、やはりそういったことは有効かなというふうに思います。

以上、簡単ですけど、終わります。

○田辺市長 どうもありがとうございました。とつても、さすが教育委員長らしい教育的なコメントで締めくくっていただきました。ありがとうございます。

それでは、最後の論点、議事の（３）「おいしい給食の提供と食育の推進について」に移ります。池谷局長から説明をお願いします。

○池谷局長 資料３「おいしい給食の提供と食育の推進」をごらんください。

「おいしい給食の提供と食育の推進」では、前回の第２回総合教育会議で報告をさせていただきました。取り組みの進捗、結果を報告するとともに、新たな取り組みについてご説明させていただきます。

まず、１ページの下段をごらんください。

初めに、学校給食の献立コンクールについてですが、豊田中学校では10月初旬に授業が終了いたしました。授業後の子どもたちのアンケートからは、「自分たちでいろいろな学校に届く給食を考えたことが、とてもわくわくした」「給食の献立をつくるのが、これほど大変だとは思わなかったので、感謝して残さず食べたい」「これからの食生活にも生かしていきたい」といった感想があり、学校給食への興味や関心を高め、みずからの食生活に目を向けるきっかけになったことがうかがえました。今後、豊田中での最優秀献立が来年２月に実際の給食として提供されます。

また、清水第七中学校では11月、籠上中学校では12月以降に授業を行ない、それぞれ来年の２月と５月に最優秀献立を実際の給食に提供していく予定でございます。

次に、２ページの上段をお願いいたします。

こちらは、いわゆる家康公献立についての取り組み結果ですが、実際に市長にも給食を召し上がっていただきました。子どもたちからは、「折戸ナスを初めて見た」「いつもと違って質素だった」といった感想が寄せられるなど、食生活と健康の関係を見直す、地域のよさの再発見など、当初の狙いは達成できたのではないかと考えております。この取り組みについては、今年度で終わりではなく、来年度以降も続けていきたいと考えております。

２ページの下段になります。こちらは新たな取り組みについてご説明させていただきます。

和食の日に、だしを使った和食を味わう取り組みで、子どもたちの日本の伝統的な食文化や和食への関心を高めることを目的に、11月24日の「和食の日」の前後に、全小中学校で、だしを使った給食を提供いたします。また、清水高部東小学校では、和食文化国民会議の顧問でもある料理研究家の後藤加寿子さんによる、だしや和食についての講話を行なっていただく予定でございます。

次に、3ページの上段をお願いいたします。最後に、牛乳ドリンクタイムの検討についてでございます。

これは、「ごはんは牛乳は合わないのではないか」という声に応えるとともに、「ごはんにはお茶」という日本人らしい食習慣を通じて、静岡のお茶に親しんでもらうことを目的に、給食の主食がごはんのときには、牛乳を給食時間以外に飲むようにできないか、モデル校を設けることから検討してみようと考えております。

教育委員会としては、このほかにも、現在静岡市行財政改革審議会において取り上げられております、学校給食の提供のあり方も踏まえて、子どもたちにどのようにおいしい給食を提供していくのか、食の大切さを学んでもらうのかを、さらに追求していきたいと考えております。

以上、3つのテーマについて説明させていただきました。

○田辺市長 はい、どうもありがとうございました。

この学校給食の問題は、私自身が、大変強い問題意識を持っていたので、この協議事項をお願いをさせていただきました。これは、冒頭申し上げたとおり、子どもの視点に立ったとき、あるいはそれをめぐるPTAのお母さん、お父さん、保護者の皆さん。市民ですよ。市民の目線から、いろんな声が私のところに届いておりました。

それを総じて申し上げますと、提供方法が違う給食が、静岡市内、併存しているんですけども、そのやり方によって、子どもの残飯率がものすごい違いが出てくるという現実があります。我々は食育の一環として、どの学校に通っていても同じようなおいしい給食を、食育の一環として提供していきたいと思っているので、それ以前の社会基盤といますか、そこのところがまだまだこれからというような現実があります。

ですので、これは言ってみれば、マクロな意味での、ここ8年間かけて給食をめぐる環境を整備していくということと、ミクロな視点の2つが必要であります。そこで、このマクロな視点については、市長部局のほうで行財政改革審議会のほうに諮問をいたしました。そして随分、アセットマネジメント、今後の公共施設の老朽化にどう対応する

かということと相まって、このことについてマクロな視点でいろいろ議論してもらいまして、先ごろ新聞等でご承知のとおり、「センター方式で統一するべきだ」という答申をいただきましたので、それに沿った形で、これから中長期的にやっていかなければならないことだということをご報告をいたします。

ここでは、どちらかというミクロな視点で、きょうはこのような論点で4つ、きょう提示をしていただきましたけれども、皆さんからご意見をいただきたいなというふうに思っておりますが、①「おいしい給食チャレンジ」から④の「学校給食における牛乳の提供」まで、ご意見をいただきたいと思っております。いかがでしょうか。

はい、橋本委員。

○橋本委員 徳川家康400年ということで、今作文コンクールをしていただいております。実は、その審査員に抜擢していただきまして、たくさんの、私は中部地区の作文を300ぐらい読みました。静岡市の子どもたちもかなり、100近く、90幾つ応募してくれたんですが、その子たちのまた6割強の中に、家康公に興味を持ったきっかけが給食だったというお話が出たんですね。給食の中で、家康公が食べたお給食を出してくれたときに、「こんな給食を食べていたのか。だからこそ75まで生きていたのか」とかね。「その彼が健康で頑張ってくれたからこそ、今の静岡があり、今の日本の平和な国があり、だから、こんな家康公が治めた静岡に暮らせることが本当に誇りである」というような論調が非常に多かったんです。私たち大人が目線で、子どもたちに考えるきっかけを与えるチャンスを給食のほうでしていただいたことによって、何かシチズンシップにつながるような視点が、「こんなふうに可能なんだ」という力を非常に強く感じました。

ですから、今年限りの、400年だったからのイベントで終わらないで、何か計画的に、家康の視点だとか、あるいは郷土。今のふるさと講座でやってくださっていますけれども、そんな子どもたちが、ふるさとの食材や徳川家康、歴史的な部分に思いをはせるような献立づくりということも、1つ、おいしい給食として、大きな視点、力になるなということをご実感しております。

以上です。

○田辺市長 なるほど、ありがとうございました。

続けてご発言をお願いします。はい、伊藤委員。

○伊藤委員 私は、この①の「おいしい給食チャレンジ」の献立コンクールの事業、とてもいいなというふうに思っております。給食というと、子どもたちの立場からすると、

必ず決まったものが、メニューがあって、それをただ食べるだけという受け身なものになってしまっているんじゃないかと思うんです。ところが、やはりたくましくしなやかな子どもたちであるためには、自分たちの力で何かつくることのできる。それはシチズンシップ教育の理念だとも思うのですが、自分たちがやったことが形になるという1つの場が、このまさに献立コンクールじゃないかなと思っております。自分たちが考えた献立が、静岡市中で子どもたちが、同じ仲間が食べるというのは、本当に素晴らしいことだと思うんです。ですから、子どもたちがやったことが、こういう形で発信して形になるひとつの機会として、これも今後もぜひ続けていきたいなというふうに思っております。

以上です。

○田辺市長 どうもありがとうございました。

伊澤委員、お願いします。

○伊澤委員 今の伊藤委員のお話もそうですし、橋本委員のお話もそうですが、両方とも、今年度初めてできて、どうやって継続していくのかということ。メニュー、献立は、学校が変わっていけば、またどんどん変わっていきます。

それとあと、僕は家康公の献立については、これだけではなくて、いろんな市の食材があるんですけども、その食材を、どうやって続けていくかということだと思うんです。今年の家康公の事業、全てそうなんですけど、「どうやって継続していくんですか」ということ。これ、つなげないと何も意味がなくて、先ほどのお茶の話ではないですけども、それをつなげてつなげて、家康公がどれだけのものだったのかということが、やっとわかっていくような気がするので、この給食も含めて、どうやってつなげていくのかということ、ぜひ考えていただきたいと私は思います。

○田辺市長 おっしゃるとおりだと思います。①、②、議論の時間がありましたけど、④について、私の問題提起で挙げていただいたんですね。世界遺産として、和食というものが、このごろの健康志向で、世界的に認められている。やっぱり日本人が健康に過ごすためには、和食というものを、一汁三菜というものを基本にするのが最もいいんだろうと、体のためにもね。その食育というものを、きちっと小中学生のときから習慣化するということのも大事な要素だろうということがあって、現実を見ると、ごはんは牛乳なんですよね。

これはもう、戦後のまずしい日本、GHQから、それこそ援助をしてもらって、脱脂

粉乳の時代から、カルシウムをとらなきゃいけないよと。栄養素から計算すると、一番牛乳がカルシウムを確保するのにやりやすいと。煮干しもあるんだけど、牛乳のほうが簡単だということで、給食で牛乳を提供するというのが当たり前になってきたんですね。それによって、日本人の食生活というのが壊れちゃっている部分があるわけですね。学校教育でそういうことをしたから、夕食のときにも牛乳を飲んだりコーラを飲んだりというのが、和食であっても、子どもに何も抵抗がなくなってきていて、それでいいのかということなんですね。

もう少し、栄養補給という点は確かに大切だけれども、そのスタイルとしての食育というのも大事なのではないかなという問題提起なんですけれども、じゃ物理的に、それが先ほどの議題の、先生の多忙化にかえってつながってはいけないという側面も考えなければいけないということなんなんですけれども、これはちょっと高木教育長から、この④の論点について、もう少し報告をお願いしたいと思います。

○高木教育長 その前に、静岡市の総合教育会議の大きなテーマの1つに給食が上げられているって、なんて素晴らしい市だなんて、やっぱり思いますね。総合教育会議が起こったゆえんが、いじめ問題、不登校問題等々だったわけなんですけれども、私たち静岡市は、今、市長のお話にもありましたけれども、「もう一度、子どもに食を」というようなテーマのきっかけで、このようにして1年をかけてじっくり話をしていると。本当に素晴らしいと思っています。

うちの学校給食課も、本当によく頑張っていますよ。本当によく頑張っていて、どこも給食課というと、少人数なんですね。その中で、毎日の安定給食のために、どれだけ努力をしているか。本当に今、新しく食に対する見方とか、皆さんの応援とか、関心とか、大きく高まっていて、いいテーマだなと思って、本当にありがたく思っています。まずこれ大前提です。

今度は④ですけれども、今市長から話がありましたけれども、私たち世代、ここにもほぼ同じ世代の人がたくさんいますけれども、ミルクというようなことから始まって、そして中学校では、直接の給食はなかったんだけど牛乳だけは出ていたというようにして、牛乳という栄養分の大切さは、かなりもう、うたわれているという中で、今の給食でも、うちの給食課も言いますけれども、完全に牛乳を外して、お茶と今の副食だけというのでは、やっぱり栄養分は足りないんだという栄養論はあります。ですので、いかにして、牛乳のカルシウム分をとるか。食文化とあわせてとっていくか。これは議

会の応援もたくさんあるわけですが、この1日の流れの中で、どうやったらいいんだらうかと。そこには当然、給食補助員さんであるとか教員のかかわりを抜きには考えられませんけれども、子どもの安心・安全、それから和を中心とした文化の継承等々の中と同時に、カロリーという、トータルでこの給食を考えていくということが必要だと思っています。

でも、この④の打ち方、私たちはまずはモデル校をと思っていますけれども、やれるんじゃないかなと強く思っています。何とかひとつモデル的な、静岡モデルをつくれたらいいなというふうに思っているところです。

以上です。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

○高野委員 牛乳ということではないのですが、先ほど市長が、小中一貫教育の中で、要は「静岡ならではのものをつくり上げよう」というふうなお話をされました。他の市を見てみますと、例えば「どこそこスタンダード」。それは学力の面であったり生活面であったりするんですけども、「この市に育った子どもは、例えば9年間、6年間で、ここまで到達したほうがいい」というのを、スタンダードという形で持っているところがあります。

静岡は、今回の総合会議のテーマに食育、給食が入ったこともありますので、とにかく食育について、小中一貫教育の中でどこまで、例えば「お茶が入れられる子どもを育てる」とか、あるいは小学校では「献立がつかれる」、中学校では「献立に沿った料理ができる」とかね。あるいは家康公についても、これは給食ですけども、「検定を受けてどこまで行った子が何%」とか、何かそういう静岡の、食育も含めて、あるいはだしについても、だしを使った料理ができる、だしについて知識があるとか、何かそういうスタンダード的なものをいろんな分野でつくる必要があると思うんですけども、食育についてスタンダードをつくることで、ちょっとこの小中一貫教育の中に含めていくという、ちょっと事務局の仕事をつくっちゃうことになるかもしれませんけれども。

そういうふうに、ポイント、ポイントでなくて、全体を通した中で、どうやって静岡の食育を——食育に限らないんですけども、つくっていくのかということ、ちょっと考える必要ってあるんじゃないかなということを今考えました。

以上です。牛乳については済みません。

○田辺市長 大切な論点をいただきました。ありがとうございます。

きょうは市長部局から、局長が忙しい中、傍聴してくれております。佐野委員長のコメントをいただいてから、ぜひそれぞれの局長から、教育委員会を応援する方向で、メールを送るような方向で、一言きょうのコメント、感想をお願いできればありがたいなと思います。

では、この学校給食についての、佐野委員長、総括的なコメントをお願いします。

○佐野委員長 まず、私の個人的なあれでは、「家康公の愛した味」は継続的にやっていただきたいなというのが1つあります。

それから、だし。もちろん大事だと思っています。

あと、牛乳に関しましては、やはり乳酸菌飲料を飲むような感覚で飲むのはいいかなと。要は、三角食べの中の1つに置くのではなくて、食べ終わってから飲むとか、そういった形の仕組みを考えれば容易ではないかなと。確かに牛乳というのは、栄養をとるには非常にすぐれた食品ですので、そういった形で、ぜひなくすことはないようにしていけたらいいなと思います。

簡単ですけど、そんなところでお願いします。

○田辺市長 ありがとうございます。大変ですけど、学校給食課長。ぜひ、よろしくお願い申し上げます。本当にありがとうございます。

それでは、子ども未来局長、自分にかかわるテーマのところ結構ですけども、お願いいたします。

○平松子ども未来局長 子ども未来局の平松です。

本当に「切れ目のない教育環境の充実」という取り組みは、高野委員からもお話がありましたけれども、静岡市は、幼小がこども園に移行したということで、ぜひ静岡らしい教育環境という部分で、こども園と小学校との連携という部分を、教育委員会と私どもで連携をしてやっていけたらなというふうに思っております。

きょうの先生方の、委員の皆さんの議論を拝聴いたしまして、ぜひ、うちも足並みをそろえて、やっていけたらなと思います。

ぜひ、お願いなんですけれども、行程表のほうに、幼小連携もぜひ取り入れていただけるとありがたいなと思います。

○田辺市長 どうもありがとうございました。

市民局長、お願いいたします。

○海野市民局長 市民局長の海野と申します。

きょうの第3回から、こちらのほうに出席させていただいています。工程表に学区の再編ということで、子ども自治会の組織と両輪で、十分な安心・安全を確保するというのが使命でございます。

全体の教育振興基本計画の中においても、子どもたちのシチズンシップ教育ということで、地域活動ですね。やはり地域を通してということになってきますので、この学区再編も、やはり子どもたちの目線で、いかにいいエリアの確保をしていくかというところも、これからお話が出てこようかと思えますけれども、私どもとしましても、とにかくよく自治会の皆さんともお話ししますけれども、「未来の子どもたちにやっぱり何を残せるのかというのが、今生きている私たちの仕事なんだ」というようなことを、よく話すことがあります。こういう機会に、委員の皆様のご意見等を聞かせていただきまして、とにかく、こういうたくましくて健やかな子どもたちに寄与できるように頑張っていきたいと思えますので、よろしくお願い申し上げます。

以上です。

○田辺市長 どうもありがとうございました。

総務局長、お願いいたします。

○三宅総務局長 総務局の三宅です。

きょうの議題3つとも、やっぱり総務局といいますか、市長部局にかなり関係のあることだと思っています。小中一貫でどう変わるかという部分も大きいと思えますし、あと多忙解消も、教員の勤務条件の話でもあります。

それから、校務支援システムも、うちの局ではICTと呼ばれていた情報管理の部分ですから、そういう形でICTの活用をどういうふうに進めていくかという全体的な話にもなりますので、そういうふうにつまえています。

それからもう1つ、給食は、先ほどありましたように、行革審で今、9月と昨日、2回やりまして、学校給食課のほうでも説明をしていただいて、行革審の各委員さんから、いろんな意見をいただいております。本日の新聞にも出ましたように、センター化の方向で、今方向性が出ております。きょう議論いただきました食育も、アセットマネジメントの視点、それから安全性の視点、それから食育の視点と、3つの視点から議論していただいて、3つ目の食育の視点も、どちらかというところ、アセットの話、あとそれから安全性の面が非常にあって、食育の話はあんまりなかったんですが、やはり方式としては甲乙つけがたい部分があります、食育については。そういう形で、今回もチャレンジ

もされていますので、そういう意味で、またこの総合教育会議で議論を深めて、また次回、11月、12月に答申をしますので、そういうことも、ぜひまた盛り込んでいただければと思います。

以上です。ありがとうございます。

○田辺市長 どうもありがとうございます。

最後に、企画局長。

○山本企画局長 ありがとうございます。

校務支援システムは、担当から、教育委員会に聞き取りをさせていただいて、パッケージソフトを既に使っている学校もたくさんあるようですので、その辺、全体として整えなければいけないのかなということがございます。また、担当されている先生が、1人ぐらいしかいらっしゃらないということもあるようですので、やっぱりきちっとした体制でご検討いただく必要があるのかなと。

それで、我々サポートして、財政のほうへ持っていくというふうに、ここでいい役をやらせていただきます。

もう1つは、これは仕事とは直接関係ないのかもしれないですけど、私、静岡に住んで、もう何十年も経つんですが、家康公のことがいっぱい出てまいりまして、例えば2007年に朝鮮通信使の400年という行事があったり、今年家康公が亡くなって400年という行事があったり、それまでずっと住んでいたにもかかわらず、家康公のこと、知らないことがいっぱい出てきて。朝鮮通信使がこの静岡、駿府を200何年間で10何回も通った。それも500人とか1,000人という行列が通っていたんだとか。そういう歴史資料が世界で一番残っているのは、実は清見寺なんだとかいうことを、実は全然知らないでできてしまっている部分があります。そういうことは地域の誇りとして、あまり教えていないんだろうなということが、この年になって、やっとわかったんですけれども。

せっかく9年間で、そのカリキュラムをお考えいただけるということであれば、詰め込むというのではなくて、体感できるように、身にしみるような形で、そういうのを子どもたちが掘り起こしていただけるようなふうにしていただけると、みんな静岡のことを自慢して、「実はたくさん自慢できる場所があったんだ」ということに気づくんじやないかなと思いましたので、差し出がましいですが、そんなことを感じました。

今後も、いろいろ教えていただいて、できる限り実現するように、ご協力をさせていただきたいと思います。

○田辺市長 どうもありがとうございました。

せっかく国が新しい法律をつくってくれました。それによって総合教育会議ができるようになりました。それ以前は、仕組みとして、教育行政というのは教育委員の皆さん、あるいは教育委員会事務局の皆さんに任せていたということであって、逆に言うと、我々は依存をしていたという言い方もできるでしょう。

しかし、国がこういう制度に改正をしてくれたということで、どれだけこの総合教育会議を実質化するか。つまりは、オール静岡市で教育行政をやっているかというのは、これはまさに、法律ができたからって、すぐにできるわけではない。とにかく自治体の力が試されているんだと。自治体の教育にかける意気込みが試金石となっているなというように感じます。

その意味では、我々自治体側の責任が重大であります。この新しい仕組みというものを最大限に活用して、そしてオール静岡市で、静岡市型の教育というものをつくっていききたいというのが私どもの共通認識にさせていただきたいというふうに思います。

また、きょうは関心もすごく高くて、記者の方が最後までずっと傍聴をしていただいたことも感謝申し上げますので、市民の方々に広くお知らせさせていただきたいと思います。

その後ろには、市議会議員の皆様も多数詰めかけてくれました。もう発言をしたいという表情がありありであるのは承知しておりますが、きょうは申しわけありません、辛抱していただきましたので、また11月の議会で、ぜひいろんな議論をさせていただければ、あるいは応援をしていただければうれしいなと思っております。ありがとうございました。

それでは、委員の皆さん、活発な議論をいただき、ありがとうございました。本日予定をしていた議事は以上となります。

前年度、教育会議が発足して、年に3回ぐらいというふうに想定をしていた、区切りの3回はきょう、最小限の責任を果たすことができたわけではありますが、きょう皆様お感じになっているように、まだまだ深掘り不足のテーマもあろうかと思えます。これで事務局に全部また委ねてしまうということはいかがなのかなという感じもいたします。今後も、必要に応じて臨時の会議を招集させていただく場合もあるということで、ご承知いただけますことに、ご異議ございませんでしょうか。

○教育委員会一同 ぜひお願いします。

○田辺市長 ありがとうございます。

それでは、また市長部局と教育委員会事務局のほうで話をさせていただきたいというふうに思います。どうぞよろしく願いをいたします。

それでは、皆様ありがとうございました。進行を事務局にお返しいたします。

○赤堀次長 皆様ありがとうございました。

これもちまして総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。